

米国ワシントン大学留学記

Department of Bioengineering
University of Washington

山田 俊輔
(ワシントン大学バイオエンジニアリング部門)

私は、2015年5月から2017年12月までの2年8ヵ月間、米国ワシントン州の University of Washington, Department of Bioengineering に研究留学をさせていただきました。シアトルは、北海道とほぼ同じ緯度に位置しているながら、近海を暖流が流れるため、夏は涼しく冬はそれほど寒くなく、非常に過ごしやすい都市として、全米でも人気が高い都市です。シアトルは雨が多いことでも知られており、エメラルドシティの別名も冠するように、緑あふれる街でした。四方は大自然に囲まれており、アウトドア派の方には非常に魅力的な場所です。

私が研究留学させていただいたラボは、シアトルの少し北に位置するワシントン大学の一角にありました。イタリア系の米国人である Giachelli 先生が主宰する研究室で、血管石灰化の病態機序の解明や治療法の開発をテーマにしています。私自身、留学前は慢性腎臓病患者が高率に合併して問題になる血管石灰化が学位取得のテーマだったので、その延長線上で研究ができたことは非常に幸運でした。Giachelli ラボはアジア諸国からの留学生が多く、国際色が非常に豊かな職場でした。私が留学した時点では、メンバーの過半数を女性が占めており、女性の活躍には目をみはるものがありました。私は英語が得意ではなかったので、ボスの計らいで、大学院生がつめている部屋に机を借りました。毎日彼らと会話できたことは、自分の英語力の向上にとっても、またメンバーとの交流を深める上でも、ボスの非常に良い“忖度”であったと思っています。

研究面では途中、実験がうまくいかない時期もありましたが、最終的には研究を形にすることができたのは幸いでした。研究留学の主目的は確かに研究することなのですが、自分の経験にかんがみますと、研究以外の収穫が大きかったかということ、帰国した今ひしひしと感じています。私の場合なによりも、家族と過ごす時間が日本にいた時と比べて圧倒的に長くなったことは、僥倖であったと思います。異国の地では、日本では経験しないような苦労も何かと多く、家族とともに多くの困難を乗り越えられたことにより、家族の絆を深めることができました。留学から戻った今、アメリカでは夢のような時間を過ごしていたことに気づかされました。また、文化的な背景が異なる研究者との交流を通じて、物事を多面的・多層的に見ることの大切さが身についたことなど、今後の自分の人生の幅を広げる可能性が

高まったことに感謝しています。

これから研究留学を考えている研究者の方においては、留学中の研究がどのような顛末をたどるにせよ、留学中に何かしら手に入れることができると思います。それは海外に飛び出すことでしか得られないものかもしれません。それが何であるのか、ぜひ自分で確かめてほしいと思っています。必ずや実りある数年間になると確信しています。留学前にはいろいろな不安が襲ってくるのですが、希望のある未来を胸に描いて、ぜひ勇猛果敢に飛び立ってほしいと思います。

最後になりますが、私の留学を快諾して下さった、九州大学大学院病態機能内科学の北園孝成教授、そして九州大学の腎臓研究室の前主任で、10年もの間私を指導して下さった、現奈良県立医科大学腎臓内科の鶴屋和彦教授、留学前も留学中もくじけそうになる私を常に支えて下さった福岡歯科大学総合医学講座の徳本正憲准教授、そして、今回の留学に際して多大なるご支援を賜りました上原記念生命科学財団の皆様にご心より御礼を申し上げます。

(30. 3. 18受領)